学校づくりの一員として

one of them 4

続々々日々の雑記帳　№50　2007. 2. 13　by　yoshiki

『今日行く』から教育

一つ問題が起こると、必ず、より悪い方悪い方へと転がっていく。それが布小の現実でした。でも、今年は不思議と「思ったよりはひどくならずに済んだ」と、ほっとする展開になることが多いのです。先週の県営5年生K君とー君のトラブルもそうでした。

月曜日の下校時、昇降口で二人が口論になりました。この日の朝、集合場所に来ないW姉弟についてー君がK君に「家へ行って呼んでこい」と言うのに対してK君は「Wの家、どこかようわからんし、集合時間に遅れても誘わずに出発するルールになっているやん。それに、僕だけが責任持たんならんことじゃない。」と反論して出発。そのことを下校時にまたー君が持ち出してしつこくK君を責めるので、カッとなったK君が持っていた登校旗の柄でー君の頭を叩き、ー君の頭に大きなたんこぶができてしまいました。保健室で冷やしながら、j先生と渡邊先生が二人の話を聴き、K君にはどんな理由があるにしろ叩いたことは悪いということ、しかし一方的に責めてカッとならせた原因はー君にあることを指導され、二人はお互いに謝り合って子ども同士の間では決着がつきました。

しかし、これでは収まらないだろうなという予測どおり、j先生がK君の母親に連絡されても

「今まで何度も二人のトラブルがあったが相手はー度も謝ってくれなかった。こちらから謝りに行くつもりはありません。」

という返事。

電話を横で聴きながら、(これはまた、こじれるぞ……)と暗い気持ちになっていると、渡邊先生が

「今晩、行ってきますわ。ーのおばあちゃんと直接しゃべっとく方がええさかい。」

と言って、帰りの遅いおばあちゃんを8時半まで待って家庭訪問してくださいました。

翌日、「どうだった?」と聞くと、

「うちの子も口は悪いけど、手は出してへん。叩かれてけがしてるのに、謝りにも来ないのは許せない。」

と一時間近くおばあちゃんの怒りの話を聴いていたとのこと。

火曜日の夜ー君のおばあちゃんがFさんのところへ相談に行き、FさんからK君のお母さんに

「あんたの気持ちもわからんことないけど、ケガさせたことについては一言あってもいいのと違う?」

という電話をして下さり、結局K君のお母さんは水曜日の朝ー君の家に行かれたようです。そのことが木曜日のー君の連絡帳に書かれていました。でも、決着したのかこじれたままなのかは不明でした。B先生は、

「今晩、もういっぺん行ってきますわ。おばあちゃんが連絡帳に書いてきやるなんて、今までないことやから。」

と、また8時過ぎまで待って出かけてくださいました。

次の日、

「おばあちゃん、納得してくれやりましたわ。学校にも礼を言ってくれやったし、やっぱり行っといてよかったですわ。」

と報告いただきました。

今まで、こうしたトラブルのとき、保護者の怒りの矛先は相手の親に止まらず、必ず学校に向けられてきました。

「学校はうちの子が悪い、言うんか。相手の親には何も言わへんのか。」

と、問題の解決を学校へ押しつけてきました。

そうならなかったのは、Fさんの働きもさることながら、渡邊先生の迅速な対応が大きかったと思います。

「今日行く(きょうい)。だから教育なんです。明日行く、では遅いんです。」

とは、ある講演会で聴いた講師のキャッチコピー。うまいこと言うなあと耳に残った言葉ですが、今回の一件はまさにそのことを実証する事例になったと言えます。

振り返ってみると、今年これまで大きなトラブルにならずに来れたというのは、たまたまそうであったというのではなく、B先生のように、先生方の勤務時間も超えた精一杯の対応があったからだと思い直しています。

例えば今、六年のO君の指導が非常に難しくなってきていますが、逆に言えばここまでよく持ちこたえられたなあと思うのです。昨年度末の予測ではおそらくー学期段階で収集のつかない事態になると私は覚悟していました。そうならなかったのは、倉田先生の言葉を借りれば「子どもにかける全エネルギーの半分以上をO君にかけてきた」という村岡先生の対応があったからです。毎日、退勤時間を過ぎたあとに一時間以上の個別指導。そのあとやっと学級の仕事。「もう九時やし、しまおうか。」と言っても、「後、五分だけ」と言って仕事するM先生。

家庭の都合で早く退勤される先生も、結局は仕事を家へ持ち帰っておられ、学級通信などほとんど家での仕事になっているのが現実。実質的な超過勤務時間はとんでもない数字になります。

今、保護者の学校評価に対して学校からの返信を作成しています。布小教育に不十分な部分はまだまだあるけれど、布小の教師がどんなにめいっぱいの仕事をしているのか、ということも是非伝えたいと思いながら書いています。